

富士川游先生稿 翻刻と補注 島野達雄

杏雨書屋所蔵の『富士川游先生稿』（乾々六九二）は、医学・医史学の泰斗として知られ、「科学者であり哲学者でありながら、徹底した宗教人」（遠山諦観）という稀有な存在であった富士川游の自筆原稿である。婦人精神文化研究会の機関誌「精神文化」の第十三巻第二冊（中山文化研究所・昭和十五年九月発行）に大部分が掲載された。

原稿は、日本・中国の古典文学や仏教説話にあらわれた「宗教の心」を述べている。

以下では、大阪府立中之島図書館が所蔵する「精神文化」（全冊）、国会図書館デジタルコレクション（約247万点）の中から全文検索によって探し出した先行文献、富士川游のその他の著作物、の三種を基礎資料として原稿を校注し、若干の補注を試みた。

旧字体の漢字は通用字に改め、古典の引用文の送り仮名・読み仮名を除いて、原稿本文には現代の仮名づかいを採用した。漢文は訓点を省き、訓読文のみを示した。記号「」は翻刻者の注記、*は原稿の表記を示している。一部の項目には、『富士川游著述選』等で加筆された文章を加えた。

徒然草^一

第十七段

『山寺^{やまでら}にかきこもりて、仏^{ほとけ}につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の^{こころ}にごりも、きよまる*まるる^る』
ここにすれ』

山寺に籠^{こも}って、仏に仕えるということは、まことによいもので、そうして居れば、退屈なこともなく、又心の穢^{けがれ}もすっかり無くなるような気がするということである。

兼好法師が仏教に対しての態度は、信心のためでなくして趣味の心からであるように思われると評している人^二もあるが、そういう見方からすれば、この段の記述などはそれを証拠立てるような感じがすると言われるであろう。

しかし私は決してそうで無いと思う。自分の家に居りて、是非せねばならぬというような用事の無いとき、退屈して、何事もやる気になれず、何となく無聊^{ぶりよう}に苦しむことがあるものである。

しかるに、山寺に籠って仏の前に経を読み、念仏を申して居れば、そういう散漫なる気分にもならず、煩惱の心のけがれも無くなってしまふような気もすると言える兼好法師の心は、旅をすれば気分が新しくなるというような趣味的なことではなく、山寺に居て、華を供え、経を誦ずしなどして仏に仕えるときは、家に居て退屈するようなことなく、心の中の濁りが拭い去られるような気がすると言う。これまさに宗教の心のあらわれである。

宗教の心といえば、すぐに仏の慈悲を思い、或は淨土を欣求こんくするようなことを指すこととのみ考える方から見れば、この場合、兼好法師は一向、そういうことは言わぬのであるから、何だか信心のないもののようなのであるが、兼好法師に仏を尊ぶ心のあったことは明らかである。

仏教の意味から言えば、退屈して何事をする気もないことも一つの煩惱である。煩惱といえば貪欲・瞋しんい恚い「怒り」・愚痴の三毒の心のみに限ると思うは誤りである。そう積極的の醜悪なる心のはたらきと同じように、何の為なすこともなく、無聊に苦しむということも、煩惱の心のはたらきである。

しかるに、仏に仕える心がはたらきて、そういう煩惱があらわれず、心の濁りが拭い去られたような感じ

がするというのは、正しく宗教の心のはたらきである。

第二十段

『なにがしとかやいひし世捨人よすてびとの、「この世のほだしもたらぬ身に、ただ空そらのなごりのみぞをしき」といひしこそ、まことにさもおぼえぬべけれ』

何とやら言った世捨人が言ったことに、「自分はこの世の中の羈絆きはん「つながり、束縛」というものは何も持つて居ないが、ただ空の名残り「移りゆく季節の空の美しさ」ばかりだけが惜しい」とあるが、まことにそうもあらうと思われるという意味である。

世捨人とは元来、俗世間との関係を絶って隱遁的生活をして居る人のことであるが、我邦でいう世捨人とは、すべて世を通れると共に仏門に入ったものである。ここに何とやら言った世捨人とは、誰人ということなしに兼好法師が自分の感想を人に託「*托」して言ったものである。

この世を捨てたる人は、自分の身を束縛するもの、すなわち妻子や財宝の類は持つて居らぬのであるが、四季の変化につれて花鳥風月の趣も次第に変わって行く、その自然界の現象に造化の妙が施されているものに対して惜別の情が残って居るという。

短い文章であるが、世の中に羈絆というものは何も

持つて居らぬ世捨人も、移り行く季節に残されたる自然の動的の興趣を見れども飽かぬ心を、美しく言いあらわしたものである。詩人が自然につきて歌い、自然に対して自から樂「*嬉」しむに異なりて、自然の森羅万象に対して敬虔なる思索である「*思索をなす」ところに宗教の心が強く動いて居ることが認められるのである。

第三十段

『人のなきあとばかりかなしきはなし。中陰ちゆういんのほど人里などにうつろひて、たよりあしく、せばき所にあまたあひみて、後のわざともいとなみあへる、心あわただし。日数のはやく過すぐるほどぞ、ものにも似ぬ。

はての日はいとなさけなう、互たがひにいふこともなく、我われかしこげにもひき「*ものいひき」したため、ちりぢりに行きあかれぬ「*あがれぬ」。もとのすみかにかへりてぞ、さらになしきことは多ほかるべき。「しかじかのことは、あなかしこ、あとのため忌いむなることぞ」などいへるこそ、かばかりの中に何かはと、人の心は、なほうたて「転て。ますます」おぼゆれ』

人の死んだあと位かなしいものはない。その死んだ

人の家族親類などが四十九日の間、山里の寺などに移つて、不便な狭苦しい所に寄り集まりて、日々追善の仏事をする。その間はまことに心忙しいもので、日早くたつて行くことは、たとえようもない。

いよいよ日が満ちて此の寺を去るという日は、人々は帰り支度に忙しく、互いに口もきかないで、勝手に自分の荷物を取りかたづけて、ちりぢりに行きわかれてしまふのである。

さて、もとの家に帰つてから、気が落ちつくに従うて、新たに故人に対する悼みの心が起つて来ることであらう。「かくかくの事は決して為してはならぬ、後のために忌むことだ」などと互いに戒い「*警」しめるのであるが、こんな果敢はない世の中に、何もそんな下らないことは言わなくてもよからうにと、今更ながら人の心がいやになる、というのである。

中陰とは四四仏語にて人の死して後四十九日間をいう。人の死後七日七日に追善を営むのは極楽に往生することを願うためで、四十九日にして往生が定まるとされて居る。

当時は中陰の間、遺族親類のものは山寺に籠つて追善ならをする習なわしであつた。中陰の間、狭い所に雑居して居る内は、お互いに共同精神を持つて居るようであつたが、その終りの日には、帰り支度に忙しく、見た

所では無情の態度にて、お互いにせつせと自分の荷物を始末して、解散して家に帰るのである。

それから家に帰りてからも、こうこういうことは決してしてはならぬ、そうでないと又死人が出来るなどと、俗間の迷信を言い合うのであるが、それは今、生きて居る人々が、自分の生命を護らんがためのものである。死後の忌事などは今日でもこれを口にするものが絶えぬのであるが、当時どのようなことを言ったのか。中陰の山寺ごもりには、さも殊勝らしげに見えた人も、いろいろの忌事を慎しみ合う。それも要するに自分の身に傷つくことを恐れるのである。

兼好法師はそれをあさましきことに思うたのである。死という絶対の無常に直面して、しかもそれが免がるべからざるものであるという事実を見ながら、かような迷信にうろろして居るのは何事か、人間の心は、やはり嫌なものであると、兼好法師はなげいて居るのである。

『年月経てもつゆ忘るるにはあらねど、「去るものは日日にうとし」といへることなれば、さはいへど、その際ばかりはおぼえぬにや、よしなしことなどいひて、うちも笑ひぬ』

年月を経ても少しも忘れるのでは無いが、「去るものは一日一日に疎くなる」ということであるから、そう

はいうが、その死別の当座ほどには悲しみと覚えぬとみえて、いつか軽い心になって、くだらないことなど言うて笑ったりするようになるのである。

「去るものは日々にうとし」^五ということは、中国「支那」の古書の『文選』の中に出て居る。その詩類の古詩十九首の中「第三」に、

去者日以疎 去る者は日に以て疎く

来者日以親 うまれ来る者は日に以て親し

出郭門直視 郭門「城門」を出て直視せば

但見丘與墳 但だ丘と墳とを見る

古墓犁為田 古墓犁かれて田と為り

松栢摧為薪 松栢摧かれて薪と為る

白楊多悲風 白楊悲風に多く

蕭蕭愁殺人 蕭蕭人を愁殺す

思還故里閭 故の里閭「村里」に還らんことを思ひ

欲帰道無因 帰らんと欲すれど道に因る無し

とあるが、「去るもの」とは死をいい、「来るもの」とは生をいう。兼好法師はこの句を取りて、長い年月へ「経」ても忘れるものではないが、去るものは日々うとくなるというのであるから、その死んだときほどは思われないと、人の死んだ後に、日を追うて追悼の情の薄くなることを述べたのである。

『からは、けうとき山の中におさめて、さるべき日

ばかり詣でつつ見れば、ほどなく卒塔婆も苔むし、木の葉ふりうづみて、夕の嵐、夜の月のみぞ、言問ふよすがなりける』

「から」というのは死骸のことである。「けうとき」というのは、気疎ときにて、気味悪く怖しきにいう。死んだ人の死骸は気味のわるい山の中に埋葬して、忌日毎にそこへお参りに行って見ると、間もなく卒塔婆も苔がはえ、散り落ちた木の葉の中に埋もれて、夕の嵐や夜の月の外には誰もたずねて呉れるものは無い。

『思いでて忍ぶ人あらむほどこそあらめ。そもまた、ほどなくうせて、聞き伝ふるばかりの末々はあはれとやおもふ。さるは跡とふこともたえぬれば、いづれの人と名をだに知らず。年年の春の草のみぞ、心あらむ人はあはれと見るべきを。果ては嵐にむせびし松も、ちとせを待たで薪に摧かれ、古き墳は犁かれて田となりぬ。その形だに無くなりぬるぞ悲しき』

思い出してしのぶ人のある内はまだいいが、それも又ほどなく無くなりて、聞き伝えるばかりの子孫はあわれとも思わぬ。そうなるからには亡き跡を弔「*吊」うことも絶え、何処の人とも名だけでも知らずに、年々の春の草ばかりが青く生えわたるのである。

物のあわれを知った人は、その光景を見て感傷する

こともあろうが、それはまだ墓の形のあるときのこと
で、後には嵐にむせぶように響を立てて居った松も、
千歳の命を全うせずして、その内に人が摧いて薪にする
のである。古い墳はその内に犁で堀りかえされて田
となつてしまふ。その形だけでも無くなつてしまふのは、
まことに悲しいことであると言うのである。

『白氏文集』に載せられたる続古詩十首中の第二六
に、

掩涙別郷里 涙を掩ふて郷里を別る
飄飄將遠行 飄飄將に遠く行かむとす
茫茫緑野中 茫茫緑野の中
春盡孤客情 春は尽く孤客の情
驅馬上丘隴 馬を駆て丘隴に上れば
高低路不平 高低、路平ならず
風吹棠梨花 風、棠梨「かいどう」の花を吹く
啼鳥時一声 啼鳥時に一声
古墓何代人 古墓何の代の人ぞ
不知姓與名 姓と名とを知らず
化作路傍土 化して路傍の土と作る
年々春花生 年々春草生ず
感彼忽自悟 彼を感じて忽ち自ら悟る
今我何當々 今我何ぞ當々たる

とある。

ただ聞き伝える、むかしこんな人があったそうだが、
というような子孫の時代になつては、あわれと思うもの
のさえなくなつて、こうした跡を弔「*吊」うことなく
絶えてしまうと、もう何処どこの何という人の墓だか、名
さえもわからず、ただ年々の春の草ばかりが徒らに繁
つて行くことを、この「白氏文集」の句によりて、年々
の春の草のみぞ、心あらん人はあわれと見るべき、と
言つたのである。

まことに人生のはかないこと、有為転変の世のあり
さま、人が死して後に幾年かを経れば全く何の痕跡も
無くなるまで、人間というものが全く消え去つてしま
うのである。

それも人の死んだあとほど悲しいものはないから、
親族故旧のものは寄り合つて日々追善の仏事を営み、
追悼の情も盛んであるが、去るものは日々に疎うとしで、
年月を経れば、死別の当座ほどは悲しみを覚えず、時々
その人の事を思い出して墓参などするのであるが、そ
ういう人が死んでしまえば、もはや直接にその人を知
つたものは無くなりて、ただむかし、かくかくいう人
が在つたげな、と聞き伝える人のみとなつてしまう。
兼好法師はかように人の死骸なきがらのあわれなる有様につ
いて自分の感想を述べたのであるが、その始めに法事
を営む折の遺族の心情を写しだしたところ、まことに

鋭敏にして細やかなる観察の力を窺うかがうことが出来る。
今日のならわしに引き直して考えて見ても、同じ気分
が味わわれるのである。

かように無常のすがたがしみじみと感ぜられたとき、
自分の身と力とが頼みにならぬことに気がつくためか、
神に祈り、仏をたのむ心があらわれるのが常であるの
に、兼好法師はこの場合、無常をかなしむ、ただそれ
だけで一歩進んで宗教に入ろうとはしないのである。

同じ法師の著述でも西行法師の『撰集抄』せんじゆつしやうなどと
相異して、こういう場合に少しも仏臭い言葉が並べら
れて居らぬのを特異とする。しかしながら、兼好法師
の心に宗教のはたらきがあらわれて居ないといふべき
ではない。

第三十九段

『ある人、法然上人に「念仏の時ねぶりにおかさ
れて行ぎやうをおこたり侍はべること、いかがしてこのさはり
「障をやめ侍らむ」と申しければ、「目のさめたら
むほど念仏したまへ」と答えられる。いと尊か
りけり。また「往生は一定とおもへば一定、不定ふぢやう
とおもへば不定なり」といわれけり。これも尊と
し。また「疑ひながらも念仏すれば往生す」とも
いはれけり。これもまた尊し』

此の文の意は、或人が法然上人に向いて、「どうも私は念仏を申す時にねむくなつて、つい睡に落ち、そのために念仏の行を怠ります。このこと、どうしたら睡の障りを止めることが出来るでありますか」と言つたところが、法然上人は答えて「寝むいときは、ねむるべし。ただ目がさめたら、その時また念仏申さるべし」といわれた。その言はまことに尊い。

又、法然上人の語に「極樂往生は屹度出来ると思えば屹度出来る。どうかわからぬと思つて居れば、どうだかわからぬものだ」と言われた。これも尊い。又「疑いながらも念仏すれば、極樂往生が出来る」とも言われた。これも又、尊い言葉である、との意味である。

法然上人が専修念仏の教えを説かれたる趣意は、『おほよそ極樂に生れ候べき行には、阿弥陀仏の本願にも、釈迦仏の説教にも、善導「大師」の解釈にも、諸師の料簡「考え」にも、念仏をもて本体とする事にて候なり』

というにありて、

『念仏申す「*申する」は、またく「まったく」別の様なし。ただ申せば極樂へむまる「生まる」と知りて、心をいたして申せば、まる「参るなり』

であるから、

『煩惱の薄き「*薄く」厚きをもかへりみず、罪障の

軽き重きをも沙汰せず、ただ口に南無阿弥陀仏と唱へて、声につきて決定往生の思をなすべし』
である。それ故に

『本願の念仏には、ひとりだちをせさせて、すけ「助」をささぬなり。すけといふは智慧をすけにさし、持戒をもすけにさし、逆心をもすけにさし、善導「大師」をもすけにさすなり。善人は善人ながら念仏し、悪人は悪人ながら念仏して、ただむまれつきのままにて念仏する人を念仏にすけささぬをばいふなり』

と説かれたのである。

或る人が睡を催して念仏の行を怠ることを心配せるに對して、法然上人がねむいことは致方がない、目のさめたときに念仏すべしと言われたことは、まことに貴いことである。又往生は一定と思えば一定、不定と思えば不定であると説きて、念仏を信ずることの大切なることを教えられたことも貴いことである。また慧心僧都「恵心僧都、源信」の『往生要集』「下巻第十」に

『若雖疑仏智 もし仏智を疑うと雖も

而猶願彼土 しかも猶彼土「浄土」を願ふがごとし

修彼書業 彼の業を修めて

亦得往生 また往生を得む』

とありて、法然上人もまたこれを承けて居られたもの

で、仏の慈悲の力の広大なるに對して、自身の心を内省せしめられたので、まことに貴く、ありがたいことであると言った兼好法師の心は法然上人の專修念仏の教えをよく呑み込んで居ったものと思われるのである。

第四十一段

『五月五日、賀茂の「*賀茂」競馬を見侍りしに、車の前に雑人立ち隔てて、見えざりしかば、各下りて埒「柵」の際によりたれど、殊に人多く立ち込みて、分け入りぬべきやうもなし。

斯る折に、向ひなる樗の木に、法師の上ぼりて、木の股につい居て物見るあり。取りつきながらいたう眠りて、落ちぬべきときに目をさますことたびたびなり。

これを見る人、嘲けりあざけて「世のしれものかな、かく危き枝の上にて安き心ありて眠るらむよ」といふに、我が心にふと思ひしままに、「我等「が」生死の到来ただ今にもやあらむ。それを忘れて物見て日を暮らす。愚かなることは、なほまさりたるものを」といひたれば、前なる人ども「まことにさこそ候ひけれ、もつとも愚かに候」といひて、皆後を見かへりて「ここへ入らせたまへ」とて、所を去りて呼び入れ侍りにき。

かほどの理、誰かは思い寄らざらむなれども、折からの思ひかけぬ心地して、胸に「*」の当「*」寄りけるにや。人、木石にあらねば、時に取りて物に感ずることなきにあらず』

これと同じような話が松尾芭蕉の『更級紀行』+「*日記」の中にも見えて居る。曰く、

『何々といふ所にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげもおかしげもあらず、ただむつむつ「むつり」としたるが、腰たわむまで物おひ、息せはしく、足はきざむやうにあゆみ来れるを、伴ひける人のあはれがりて、おのおの肩にかけたるものども、かの僧のおひぬものと、ひとつにからみて、馬につけて、我をその上にのす。

高山奇峰頭の上におほひ重りて、左は大河流れ、岸下は千尋の思をなし、尺地「わずかな土地」もたひらかあらざれば鞍の上、静ならず、ただあやふき「*あやうき」煩のみ「*煩の」やむときなし。

棧はし、寢覚など過ぎて、猿が馬場、たち峠などは四十八曲りとかや。九折重りて雲路にたどる心地せらる。歩行より行くものさへ、眼くるめき、たましひしほみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕、いともおそるる気色見へず、馬の上にてただねぶりにねぶりて、落ちぬべきことあ

またたびなりけるを、あとより見あげて、あやふ
きこと限なし。仏の御心に衆生の浮世を見たま
ふも、かかることにやと、無常迅速のいそがはし
さも我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風も
なかりけり、云々』

途中で備うた奴僕が、その土地に慣れたものと見え
て、旅人には危険窮まりなき場所にて、馬の上にて平
気で居寝りして居るのを、後の方から見て、無常迅速
の人生が思い出され、しかも浮世の衆生がそれと知ら
ずに迷える相を、仏の御心にあぶないと見たまうであ
ろうと、我身を省みての芭蕉の心は、

かけ橋や 命をからむ 蔦かづら
の発句をよましめたのであった。

『新選妙好人伝第二編・松尾芭蕉』の加筆』

高山の谷川の上を渡るべき栈橋が高い所にかけてあ
り、岸下をみれば千尋の思いをなし、目もくらむほど
であるのに、それを平気で渡りて、些かも身の危険を
知らず、かけはしをからみたる蔦はまことに命をから
むといふべきであるのに、それを何とも思わず、無常
迅速の人生のかけ橋を平然とわたって居る人々の愚か
さを挙げて、しかも深く自己をかえりみての発句であ
る。「加筆終」

兼好法師が賀茂の競馬を見て居るときに、向うの櫓

の木に一人の坊主がのぼって木の股の所にとまって見
物して居る内に、居眠りを始めたのを見て、皆のもの
は天下の馬鹿者だと評し合って居たのに、兼好法師は
ふいと心に感じた。私達はいつ死ぬるかも知れぬ。し
かるにその死ということを忘れて、安閑と競馬の見物
をして居る。私達の馬鹿さ加減は、あの法師が木の上
で居眠りをして居るよりは一層上ではないか、と思う
ままを口に出して言った。

そうすると、前の方に居った人達が、本当にそうで
した。全く我々は愚かものでござりますと云って、皆
振りかえって自分を見て、こちらへ御這入りなさいと
言って、場所を譲って前の方へ入れて呉れた。

この位の道理は誰人でも思いつくことであろうが、
皆のものが競馬の見物に興じて居る折柄に、突然かよ
うなことを聞いて、はっと胸にあたりて感服したので
あろう。

人間は木石でないから、あるときふと物に感ずるこ
とがある。皆人もその心に自分をえらい人と思つて、
席を譲つて呉れたのであろうと兼好法師は言つて居る
のであるが、芭蕉がそういう場合に、すぐに仏の慈悲
を考え起こしたのにくらべて、全然相違した心のすが
たと思われるが、実際はそうでなく、そういう場合に
兼好法師が、自分の心のすがたを省みて、そのまま言

い放ちたる言葉は、宗教の心のあらわれであったと言わねばならぬ。それがために人々もその言に感じて、席を譲ったのであると言うべきであろう。

「精神文化」第十三卷第二冊の加筆」

『人非木石豈無感矣 人、木石にあらざ、豈感ずること無からんや』とは、『文選』「自氏文集四・鮑照詩」の中に出て居る語であるが、人は木や石の如くに無情のものでは無いから、誠によりて教ゆれば、自得の良心が感じ動くことは必然のことわりなることを兼好法師は言うのである。

人々が競馬の見物に興じて我を忘れて居る場合に、我のすがたの愚かなることを説かれたるを聞いて、その誠にうごかされたのは、その良心の自然のあらわれである。教ゆる人なければ、心の鏡、いつまで曇りて暗きことなれども、誠によりて教ゆれば、自得の良心が自ずから感じ動くによりて、誠を知ることが出来るのである。

人々が安閑と競馬の見物をして居る場合に、同じように見物して居った坊主が木の上にて居眠りをして居るのを見て、天下の馬鹿者「*物」と評するのは我をかえりみずして徒らに他を譏る凡人の習いであるが、しかも人間には良心があるから、誠に遇えば、我にかえることのあるのは自然である。「加筆終」

宗教話藪 (二) 十一 富士川游^{十二}

楠木正成^{十三}

我国忠臣の第一人者と称せらるる楠木正成は、夙に心を禅要に委ね、諸方の師に参じて居ったが、あるとき大和を旅行して片岡^{十四}を経たときに、一人の禅僧に遇うた。その僧に就いていろいろと禅の要義を質して得る所があつたが、最後に「此の上、更に密旨「秘密の教義」があるのではないか」と問うた。すると禅僧はそれには答えずして、

『公の名は何といふか』

と問うた。

『楠木多聞兵衛正成』

と答えると、禅僧は、

『正成!』

と呼んだ。正成はすかさずに

『応』

と答えた。呼べば答える。這裏「この間」これなんのある所ぞ。正成と呼ぶは我、応と答えるは我、彼我一体、此の間に何が存するか、ということを示すのであつた。

正成は此の時、豁然として悟るところがあつた。そ

れから此の僧に就いて心要を問うた。あるとき、

『路を以て軍に勝つは如何』

と問いしに、その僧は只一語

『至善を兵とせよ』

と答えた。

正成はこの一言によりて心胸を開き、兵を用うること自在であったという。この禅僧は関山慧玄禅師であったことと思われるが、正成はかようにして至善を兵とすることに心がけ、その旗印として「非理法権天」の五大字を書いたものを用いた。理も法には勝たず、法も権には勝たず、しかもその権も天には勝たず、人を相手とせずして天を相手にするという意であった。

時に建武三年「三三三」五月十六日、正成は綸旨「朝廷の命令」を奉じて京を發し、湊川に至り、広嚴寺の前に陣した。広嚴寺は楚俊禅師が中国「*支那」から来て後醍醐天皇の勅願によりて立てられたもので、楚俊禅師が住職して居った。正成はこの楚俊禅師に参じて、

『生と死と交謝せんとするとき、如何が覚悟すべき

か』

と問うた。すると禅師は、

『両頭を截断すれば、一劍、天に倚りて寒し』

と答えた。生だの死だのという両頭「二つの考え」を截り去れば、一劍、天に倚「寄り」りて寒し、と落ちつくと言

われた。

そこで正成は、

『落ちつく所は何処か』

と聞いた。

楚俊禅師は一喝した。そういうことは執著「執着」すべきでないというのである。正成は疑団「疑い」、忽ち氷解して遍身汗を流し、禅師を拝して礼したという。これは楚俊禅師の行状『明極和尚行状』に記してあることである。

両軍陣を構え、離合十六回、正成は広嚴寺の無為庵に入り、弟の正季を始め一族十三人、手のもの六十余人と共に自刃したのである。『太平記』「卷十六正成兄弟討死の事」には、

『六間の客殿に二行に並み居て念仏十返ばかり同音に唱へて一度に腹を切つたりける「*切った」』

と書いてあるが、正成は、座上に居った弟の正季に向つて、

『そもそも最期の一念によりて善悪の生を引くといへり。「九界の間に何か御辺「ごへん」の願ありや』

といひければ、正季はからからと打ち笑ひて、「七生まで只同じ人間に生れて朝敵を亡ぼさばやとこそ存じ候」といひければ、正成は世に嬉しげなる気色にて、「罪業深き悪念なれども我もかや

うに思ふなり。いざさらば同じく生をかへてこの
本懐を達せむ』

と契りて、兄弟共にさしちがえて同じ枕に卧したと評
されて居るのである。

『富士川游著述選第四卷』(以下、著述選第四卷と略す)の加筆

楠氏が相手とめざすものは朝廷に背くところの重罪
のものである。しかも七たびまでも生をかえて、これ
を滅ぼさんとする罪業深き悪念であると言うところに、
正成の心が極めて宗教の心を強くあらわして居ったこ
とが思われる。しかも同時に朝敵を滅ぼすことは編旨
によるのであるから、正成の心は、南無阿弥陀仏と打
ち出す剣には、敵も味方も西方浄土へ行けよと念じた
のであろう。「加筆終」

宇宙の声^{十五}

一人の青年の病身なるものが、ある禅宗寺の和尚の
ところへ接心に来た。この青年は中々の理屈屋で、入
室「修行」に来ては何とか理屈をこねる。

「うんと座つて宇宙の声を聞いて来い」
と誠められても、中々理屈を止めず、目も赤くなるほ
どに興奮して

「こんなことなら帰る」
と怒鳴って帰って行った。ところが最後の接心の日に

来て言うよう、

「その晩、腹が立ってくやしいので眠れなかった。
ただ幾度か、ねがえりをするばかりであった。す
ると母親が心配して、寒いのだろうから一枚かけ
てあげようと、蒲団をかけて下さった。

私はそのとき始めて母の慈愛の心がしみじみと感
ぜられました。今まで幾度もこんな言葉を聞きま
したが、本当の親の慈悲というものを知ることが
できませなんだ。母の愛さえそうでありましたら、
仏の慈悲がわからなかったのも尤もなことであ
りました」

と、涙を浮べて慚悔したという。

自我執著「執着」という垣が取り払われるれば、法の
慈悲はすぐに這入って来るものである。

〔著述選第四卷の加筆〕

こういう風に自分で働く心持が強い間は、その奥に
あるところの仏性を見付けることが出来ませぬ。はじ
めからあったに違いない親の慈悲が、自分というもの
を省みない間は何とも思わなかったのであります。と
ころがこの青年は和尚に叱られて腹が立ったために夜
も寝られないところまで来た。その時母親が蒲団を掛
けて呉れたので、はじめて慈悲を知ったのであります。
即ち法を聴くということは、我を空しくしなければ起

こるものではありません。宇宙の声を聴けと言われたのは、一切のものが法を説いて居るのであるから、それを聞けということでありましょう。「加筆終」

片手の声^{十六}

禅宗の高僧の白隠^{はくいん}禪師が説教中に、半ば右の手を上げて、

「この片手に声ありや無きや」

と、参詣の人に尋ねられたが、ただの一人も答うるものがない。皆の人々は、あれが禅宗のさとりと見える、両手叩けばポンポンと音がするが、片手の声とは訳がわからぬと、互いに顔を見合せて不審の眉をひそめて居った。すると妙心という尼が、高座の前に進み出て、

白隠のあげて声あり片手より

両手合せて南無阿弥陀仏

とやった。

白隠禪師はこれを聞いて、

「其方^{そのほう}は真宗の門徒であろう。感心なことじゃ。し

かし片手の声は法然や親鸞の宗旨ではわからぬぞ。

それは禅宗の大悟徹底というものじゃ」

と言われた。

そうすると、妙心はすぐに、それに応じて、

片手にも声あればこそ招^{まね}かれて

弥陀の浄土へ参^{まゐ}る妙心^{十七}

と、一首の歌をよんだ。大悲の親様は十劫^{じゅうしやく}正覚^{しょうかく}のむかしより呼びつめて待つてござる。右の御手^{みで}がこの弥陀のため、左の御手が必ず助ける、その御呼声^{みよびこえ}じゃ、と妙心の心には会得せられたのである。

「『精神文化』第十二巻第七冊の加筆」

こういうことは其の心が宗教のはたらきを十分にあらわすようになりて、すぐに感知せられることである。普通の考えでは何のことかわからぬのが当然のことであるが、宗教の心があらわれて居れば、片手はおるか、世の中の一切のものが法を説いて居ることが知られるのである。其の法を聞くことが出来るようになれば、この世は安楽に、自由に、何等の苦しみも無しに生活することが出来るのである。「加筆終」

仏智回向^{十八}

江州の了信というもの、香樹院師^{かじゆいんし}を訪うて、

「私は御前^{ごぜん}へ上がりましても、同行聚^{どうぎょうじゆ}の中^{なか}にても、

口では立派に調子合わせて喜んでは居りますが、

もしやもしや心底が違うては一大事じゃ、という

心配がござります」

と言った。

香樹院師曰く、

「それが信相続すがたの相じゃ」

了信の曰く、

「ありがとうございます、左様なれば、これながらにて往生させて貰もらいます」

香樹院師の曰く、

「往生に間近くなれば、それも無いようになるほどに」

安政四年「二八五七」八月十日、香樹院師が八十六歳、死亡の前七か月のこと、了信は香樹院師の病氣見舞のために参上して、師の枕許まくらもとに手をつきければ、香樹院師は、

「どうじゃ、どうした」

と言われた。そこで了信は

「私はこれまで持ちならべて居りました信心も安心も今は何処どこへやらいってしまいました。唯今ただいまは御呼声よびこゑ一つが杖とも力ともたのみきつて居るばかりでございます」

と言った。そのとき香樹院師は、

「それが、しとおせ「仕果せ」たのじゃ」

と喜ばれたので、了信は、

「ありがとうございます。年久ひさしく御化導ごかどうを蒙まうりまして、何とも御礼の申し上げようもござりませぬに、今日ただまで只口ただ先ばかりで申し上げて御胸を

いためましたは、仏智回向ぶつちえこう「阿弥陀仏から下された供養」の御なしわざということが知られぬからでございます

と言うと、香樹院師は言葉を改めて、

「もう仏智回向がす「済」めたか。それがすめぬ故に、久遠劫くおんせうより迷うて居るのじゃ、それでももうよいと言うて捨てておくのではない。聞いては喜び、聞いては喜びして居るのじゃほどに」

と言われた。

それがまことに信心を獲得した心のすがたであろう。

『新選妙好人伝上巻』の加筆」

内観「内省」が徹底してここに始めて聞其名号・信心歓喜「その名号を聞きて信心歓喜せん」の心があらわれるのである。「中略」まことに我々はただ仏の呼びかけられることを聞くべきのみである。我が身と心とをたのむことなく、一切を挙げて仏の慈悲の力に依託「*托」すべきである。本願の宗教の真意は実に此に存するのである。

「加筆終」

檀林由仙

檀林由仙というは外科の名家であつたが、その性、朴直寡欲ぼくちくかよく、強いてその技を売らんとせずして、家貧しく、居るに奴婢ぬひなく、出づるに従僕まじなく、粗服を纏まとい、

薬籠も自ら携たずさうるほどであった。しかるに由仙は中年にして妻を失い、一男一女を育みしが、平日座上に父の席を設けて膳を供えること日に三度、飯も汁も生ける人の如くに盛り換えて進める。味の善し悪しにつきて子供等と相あ図はかつて、始めて来たる人、物越しに聞きては、老父正まにいますと思うほどなりしと。

〔著述選第四卷の加筆〕

斯か様ような心持は、親から出た自分の体からだを尊重するあまりに、その心持が強くあらわれたのであります。その心持は道德以上のものであります。〔加筆終〕

勝澤一順二十

勝澤一順は福井藩の侍医、学を好み、医術の外、詩文を巧たくみにし、和歌も上手であった。一順が嘗かつて言ったことに次のようなことがあった。ちよつとしたことであるが、以もつて一順の心が人にすぐれて内省的であったことが窺うかがわれるのである。

「召し使う下僕げぼくに文吉というものが有った。質朴な性質にて、余の言葉に少しもさからいたることなかつた。或時あるとき、話の序ついでに、余が言いしことを皆善しと思ひて、斯かくは従したがうにやと問いけるに、否いな、左様にては候あわず、時には悪しきこともおわせど、主人なれば枉まげて従したがい侍はべるなりと答こたへ。問

えばこそやあれ、問いわざりせば、自分は皆善しと思い居いるべきを」

〔著述選第四卷の加筆〕

もし問いわなかつたならば、自分のいうことに間違まちがひがないと思いつて一生過あごしたかも分わからぬ、といったさうであります。実に謙虚な態度であります。〔加筆終〕

勿体ない二十一

江戸のある儒者の家に、浄土真宗生れの下女があつた。明け暮くれに仏の御慈悲を喜んで居いつた。或時あるとき、主人はその女中に向むかひて言うよう、

「そちは善あき阿房あほうなり。何なにがありがたくて法談参まりをするか。そちが信仰する蓮如上人は大の愚僧故ぐ、此この間あいだも御文おふみを見れば一いの字あに仮名かなつけするほどの愚僧なり。信まずるに足らぬ」

下女はさめざめと泣なきて、

「一いの字あに仮名かなつけて、あなたあなたの御笑ごえいなさるようなことをさせますは、この私わたしゆえでござります。それ御存ごぞんじのない蓮如様ではござりませぬけれども、この一いの字あも知らぬ、はしたな私わたしを浄土参まりさせたいばかりの思おぼ召めしで、恥はも外聞ぐわいもんも御ごかまい下されぬ。さりとは勿体もったない」

とて、泣なきながら感謝かんげしたのであつた。儒者も下女の

この態度に感じ入りて、遂に浄土真宗の教えに帰するに至ったという。

〔著述選第四巻の加筆〕

こういう心持というものは、我と思う心が出なければ誰にでも起きる心持であります。学問ならば勉強次第によって深くも浅くもなるものでありますが、宗教の心はそんなものとは全く違うのであります。〔加筆終〕

義山和尚^{二十一}

享保の頃、京に義山和尚という浄土宗鎮西派の大徳がありて、専心に念仏を修して居られた。この和尚の許へ、真宗の所化〔修行僧〕二人^{二十三}通いて教えを受けて居ったが、或時、夜更ける頃まで居残りて法を聴いた。義山和尚、

「寒き夜なれば小豆粥^{あずきがゆ}にても申しつけん」

と小僧を呼びて、そのことを命ぜられた。あまりに遅くなるので、和尚は自から起ちて内に入れ、しばらくする内に人の泣き声きこゆ。二人は怪しみ端耳^{はみみ}をそばたて、よく聞けば、和尚の声である。なおよく聞き定むれば、

「無始^{むし}よりの薫習^{くんじゅう}二十四によりて、あたら功徳^{くどく}を奪われたり」

と、和尚がさめざめと泣かれるのであった。

ややもして、和尚こなたへ来られたれば、その由を聞くに、和尚の曰く、

「我は日課六万遍^{とよ}ずつ唱えて後世「一生」の料「數量」とする。今勝手「台所」へ入りて見るに、小僧が箸の取りちがえたるを叱^{しか}「*呵」りたるが、つくづく思えば、今日積みたる功徳も僅かなる貪欲よりして瞋恚^{しんい}「怒り」を起して煩惱の賊のために奪われたと思えば、かなしかりしと、思わず声たてて泣きたり」

と曰われければ、二人の僧はその志に感じ、共に涙を流したるが、二人のものは、それにつきても、

「我等の忝^{かた}じけなきは、左よりの自力^{じりき}の善根をつとむるに及ばず。願力^{がんりき}不思議に助けられて往生することが出来る」

そのありがたさを感じることの出来る、浄土真宗の教えを奉ずる二人のものは、帰る道すがら、互いにそのことを物語り合^あひて喜びしと。

〔富士川游著述選第五巻〕の加筆

義山和尚のような大徳の人でも貪瞋痴^{とんしんち}の三毒の煩惱から離れることは容易ではない。一日苦勞して六万遍の念仏をして、そうして大きな功徳を積んだようでも、お客に出す箸^{はし}のことで以って、瞋恚^{しんい}のほむら「炎」をもやすと、勞して作り上げた功徳はまるで消えるという

ことになる、まるで賽の河原に石を積むようなものである。自分等は仕合せに浄土真宗の流れをくんで居るから、そういうことをしなくても仏のお慈悲で往生することが出来るといって喜んで話をしたということが「安養寺性均『新選発心伝』」に書いてあります。「加筆終」

南無阿弥陀仏^{二十五}

伊賀に三左衛門とて名高き妙好人^{みょうこうにん}が居った。大阪に姪が縁づきて居ったのを尋ねて逗留する内、称名念仏を常として居った。或時隣家の医者^{いしや}の法華宗を奉ずるものが、念仏を嫌忌し、うるさがって、三左衛門の所へ来たりて、盛んに念仏を誹り、

「南無阿弥陀仏は南に阿弥陀仏なしということじゃぞ」

と言った。そこで三左衛門の言うよう、

「お前様の御名は何と申します」

「わしは山川道生という」

「さようならば、山は木のある山でございますか」

「そうじゃ、木のある山じゃ」

「川は水の流れる川でござりますか」

「そうじゃ、水のある川じゃ」

「御名の道生とは何と書きますか」

「道はみち、生はうまるる」

「それではお前様は道でお生まれなされた御方でござりますか」

そこで医者^{いしや}の曰く、

「山川とはわしが苗字、道生というのは、わしが名じゃ」

三左衛門曰く、

「左様なれば、お前様は、南無阿弥陀仏は南に阿弥陀仏は無しということじゃとおっしゃるが、南無阿弥陀仏というは阿弥陀仏如来の御名でござります」

医者は返す言葉なく、「このおやじめが」と言つて帰った。

その翌日、又来りて、

「昨日の話につきて、もっと承^{うけたまわ}りたい」

とて、くわしく浄土真宗の話を聞き、流石^{さすが}に頑固の医者もその説に感じ入りて、終に法華宗を離れて浄土真宗に帰したということである。

補注

一 徒然草 『徒然草』のシリーズは、雑誌「精神文化」

の第十三巻第一冊（昭和十五年八月三十一日発行）から連載が始まった。ここに翻刻した原稿の大部分は、「精神文

化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に『徒然草（二）』および『宗教話藪（二）』として掲載された。これまでほとんど知られることがなかった富士川游の最晩年の原稿と推定される。

「居った」「帰りて」「趣味的のこと」などの独特の表記法と変体仮名が随所にあらわれている。文末は、「である体」に統一されている。

「精神文化」は、中山文化研究所（大正十三年創立。所主は中山太一大阪太陽堂店主）内に所長の富士川游が創設した婦人精神文化研究会の機関誌として、昭和四年（一九二九）四月に創刊され、富士川游の死後、昭和十九年（一九四四）八月の第十六卷第六冊をもって休刊するまで発行が続いた。

二 評している人 沼波瓊音『徒然草講話（再版）』（大正三年）は、この十七段に関する国文学者・内海月杖の感想を紹介している。「兼好が仏教に對した態度は信仰の爲で無い」、「信仰の心からでは無くて、趣味の心からだ」と思うが、この段なども、現にそれを証拠立てているように感じる」。この文から、原稿の「信心のためでなくして、趣味の心からであるように思われる」と評している人」は、内海月杖を指すことがわかる。

三 羈絆 前出の沼波瓊音『徒然草講話』の「訳」は、「何とやら云った世捨人が斯う云った。自分はこの世の中

の羈絆と云うものを何も持って居ない者である」と、原稿と同じ「羈絆」を用いている。「評」では、「世捨人は兼好法師自身」という内海月杖の推測に対して、沼波は原稿と同じように「或はそうかもしれぬ」としている。また、原稿が引用している漢詩二首はどちらも『徒然草講話』の頭注に示されている（補注五、六参照）。このように原稿は大部分を沼波瓊音『徒然草講話』に依拠している。

以下、「依拠」とは、先行文献が原稿の引用文のほぼすべてを記載していることを指す（補注四参照）。ここでは約247万点におよぶ国会図書館の明治・大正・昭和の全文検索可能なデジタル化資料（デジタルコレクション）を利用して、原稿本文とほぼ同一の記事がある先行文献のうち、もっとも古いものを提示している。

四 中陰とは 「中陰とは仏語にて人の死して後四十九日をいう」以下は、『徒然草講話』には見当たらない。すなわち、原稿の「宗教の心」に関連した部分は、富士川游の考察にもとづいている。これ以降の漢詩や『太平記』『更科紀行』などでも同様に、古典の訳・解釈は先行文献に依拠しているが、「宗教の心」について述べるときは、独自の考察をおこなっている。

五 去るものは日々につとし 無名氏「去者日以疎」の詩は、沼波瓊音『徒然草講話』の頭注に訓点つきで掲げら

れている。第二句の「来者日以親」を、原稿では「生者日以親」と頭注と同じように誤ったあと、本来の「来者日以親」に訂正している。ここからも、富士川游が『徒然草講話』を参照したことがわかる。

六 続古詩十首中の第二 白楽天「掩淚別郷里」の詩も、

沼波瓊音『徒然草講話』の頭注にある。前出の無名氏「去者日以疎」の本歌取りに相当する漢詩。

原稿には送り仮名・読み仮名は省略されて、返り点だけが付けられており、ここでは『徒然草講話』の頭注によって読み下した。

七 西行法師の撰集抄 西行が作ったという仏教説話集。

芳賀矢一校注『撰集抄』(昭和二年名著文庫)の和田萬吉による「はしがき」に、西行のほかに書き加えた者がいるという「他人増補説」が「争うべからざる事実」として指摘されている。

八 疑ひながらも 法然上人が示した三条のうち、第一条

は『観無量寿経』にこれに近い性格をもつ記述があり、第二条は道光編『和語燈録』の「往生大要集」が出典だが、第三条「疑ひながらも念仏すれば往生す」の出典には諸説がある。この項、松本真輔『徒然草』の疑心往生説」(『国文学研究』一二〇、一九九六)による。

九 専修念仏の教え 引用された四条は、望月信道著『浄

土宗聖典(三版)』(明治四十四年)の「法然上人行状画図

(法然上人行状画図、勅集御伝ともいう)に依拠している。第一条「おほよそ極樂に」は、「法然上人行状画図」の「上人常に仰せられる御詞」の第二十二が該当する。第二条「念仏申す」、第三条「煩惱の薄」、第四条「本願の念仏」の三つは、「上人常に仰せられる御詞」の第二十一にある。原稿の第三条は「煩惱の薄く、厚きを」と、『浄土宗聖典』の誤った記述をそのまま記している。

十 更科紀行 阿心庵雪人『芭蕉全集・俳諧文庫第一編

(明治三十年)の『更科紀行』に依拠している。

同書は「あやふき」とすべき二カ所を「あやうき」と表記している。原稿の一カ所は「ただあやうき煩の」と同書の通り表記し、もう一カ所は「あやふきこと限りなし」と本来そうすべき表記になっている。

原稿の二カ所の表記はそのまま『新選妙好人伝第二編・松尾芭蕉』(昭和十二年)に受け継がれ、『新選妙好人伝上巻・松尾芭蕉』(昭和二十九年)でも「あやうき」と「あやふき」が残っている。

なお、妙好人とは、「仏教を体験した人」「浄土真宗の熱心な信者」を指す。富士川游は『新選妙好人伝』の序文で、文政元年(二八一八)以来、妙好人の伝記は幾つとなく刊行されたが、「十分に宗教の心をあらわしている」と認められる人々」を新たに選んだと述べている。

十一 宗教話藪(二)『宗教話藪』は「精神文化」第十三

巻第一冊(昭和十五年八月三十一日発行)から掲載が始まった。『宗教話藪(二)』の「南無阿弥陀仏」以外の原稿は、続く第十三巻第二冊(昭和十五年九月三十日発行)に掲載された。理由は不明だが、「南無阿弥陀仏」は「精神文化」第十二巻第七冊(昭和十五年二月二十九日発行)の「宗教叢談(七)」にほぼ同文が掲載されている。

十二 富士川游 「富士川游」の署名と原稿本文との筆跡は一致しており、ここに翻刻した『徒然草』および『宗教話藪(二)』は、自筆原稿と断定できる。

十三 楠木正成 前半の一禅僧(関山慧玄禅師)との対話は、岩野真雄編『仏教信仰実話全集第十二巻』(昭和五年)に加藤咄堂が著した「非理法権天」に依拠している(補注十四参照)。後半の楚俊禅師との対話と正成正季兄弟の自刃は、同じく『仏教信仰実話全集第十二巻』の「生死交謝」「七生報国」に依拠している。

大阪太陽会での講話(昭和十三年十一月十七日)のために用意した原稿であろう。「精神文化」第十一巻第四冊(昭和十三年十一月三十日発行)に掲載後、「精神文化」第十三巻第二冊(昭和十五年九月三十日発行)に、再度掲載された。

『著述選第四巻』(昭和十六年)「生活と宗教・感情の統一(一)」の「楠木正成」には、文末が「であります」「でありましょう」などの講話体(講義体)のものが

掲載されている。

桐原葆見によれば、『著述選第四巻』「生活と宗教」の各篇の原稿は、大阪太陽会でおこなわれた講話の速記録を秋山不二(元山不二子)が講話そのままに筆録し、整理したという。この『著述選第四巻』は、太平洋戦争開戦の日、昭和十六年(一九四二)十二月八日に印刷、十二日に発行されている。

十四 片岡 原稿には、正成が大和を旅行して片岡を経たときに一人の禅僧に会った、とあるが、片岡の地名は『明極和尚(楚俊禅師)行状』、『仏教信仰実話全集』にはない。日露戦争さなかの明治三十八年(一九〇五)、丹靈源編『戦時布教材料集』と真言宗の専門誌「六大新報・一一〇号」には片岡がある。

十五 宇宙の声 東京真宗学会『信仰聖話大集第一巻』(昭和十一年)の「宇宙の声を聞く」に依拠している。大阪太陽会での講話(昭和十四年九月十八日)のための原稿であろう。「宗教の講話も、この頃は系統立った論述は稀になつて随筆的な譚を諄々と愉しみて話されるといふ風であつた」(桐原葆見)。

「精神文化」第十三巻第二冊(昭和十五年九月三十日発行)に掲載ののち、『著述選第四巻』(昭和十六年)「生活と宗教・法を聴く」に「宇宙の声を聞く」という小題で、筆録・整理して講話体で掲載された。

十六 片手の声 明治四十五年（一九二二）の田淵静縁編『説教妙弁辞典』の「白隠禪師と尼妙心」に依拠している。

大阪太陽会での講話（昭和十五年一月十七日）「小我と大我」の原稿であろう。

「精神文化」第十二卷第十冊（昭和十五年五月三十一日発行）の「聞法の生活」に掲載され、「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に再掲された。

翌年『著述選第四卷』（昭和十六年）「生活と宗教・小我と大我」に筆録・整理して講話体で掲載された。

『新選妙好人伝第八編・香樹院徳龍師』（昭和十二年）や『新選妙好人伝上巻・六香樹院徳龍師』（昭和二十九年）

の「法語雑録・信相続の相」でも読むことができる。

十七 弥陀の浄土へまゐる妙心 白隠の「隻手の声を聞け」という公案に対する歌は、ここに掲げられた妙心の二首のほか、「白隠の片手の声を聞くよりも両手叩いて商売をせよ」、「商売が両手叩いて出来るなら片手の声は聞くに及ばず」という狂歌が知られている。

十八 仏智回向 大正八年（一九一九）加藤智学編『香樹院講師語録』の「心底が違ふては一大事」「それが仕おほせたのぢや」に依拠している。

「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に掲載された。『新選妙好人伝第八編・香樹院徳龍師』

（昭和十二年）に加筆された文章がある。

十九 檜林由仙 伴高蹊『近世畸人伝第三巻』（明治二十年）に依拠している。次項の「勝澤一順」とともに、大阪太陽会での講話（昭和十四年十月十八日）「無我」の原稿であろう。

「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に掲載。講話体の『著述選第四卷』（昭和十六年）「生活と宗教・無我」では檜林宗建と表記している。

二十 勝澤一順 福田源三郎『越前人物志中巻』（明治四十三年）の勝澤一順自身が書いた「初音草」に依拠している。前項の「檜林由仙」と同様に、大阪太陽会での講話

（昭和十四年十月十八日）「無我」の原稿であろう。「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に掲載。講話体の『著述選第四卷』（昭和十六年）「生活と宗教・無我」では勝澤一純と表記している。

二十一 勿体ない 松原恭讓『真宗の信念と妙好人逸話』（昭和十一年）の「江戸の某儒者と其の下女の事」に依拠している。

大阪太陽会での講話（昭和十五年五月十七日）の原稿であろう。「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発行）に掲載。『著述選第四卷』（昭和十六年）「生活と宗教・宗教の心」に講話体で筆録・整理して掲載された。

二十二 義山和尚 義山和尚が箸（または茶碗）のために客人を待たせたまま台所で泣く説話の起源は、安養寺性均と学応の二人の体験談にある。元文二年（一七三七）

に性均が『新選発心伝下巻』に「一念起動の萌を懼て
発心す・洛東義山上人の事」を著し、世に広まった。以
後、『新撰各宗説教材料集第三卷』（土岐善静・加藤咄堂編、
明治三十年）、『高僧叢談』（松宮明学編、明治四十五年）など、
多くの法話教材に見える。

原稿と同じ「無始よりの薫習」の語があることから、
前田慧雲『修養と研究』（明治三十八年）の「智的修養と情
的修養（上）」に、原稿は依拠したと考えられる。

「精神文化」第十三卷第二冊（昭和十五年九月三十日発
行）に掲載された。

「精神文化」第十一卷第四冊（昭和十三年十一月三十日発
行）にある「発露の涙」は、富士川游が自ら講話（時期不
詳）を筆録・加筆したもので、性均の『新選発心伝』の
原文に近い内容となっている。

この「発露の涙」は、『著述選第四卷』（昭和十六年）に
も掲載され、『著述選第五卷』（昭和十七年）の「唯信鈔文
意講話・第七講」にも、大阪婦人精神文化研究会での
講話の速記録を編集者が筆録・整理した、同様の内容
を持つ文章がある。

二十三 真宗の所化二人 『新選発心伝』を作った性均お
よび性均に同行した学応の二人。

二十四 無始よりの薫習 昔からの習慣。ここでは、高級
な箸を賓客用に備えていたことを指す。小僧は和尚の

習慣にそむき、誤って二人の修行僧に高級な箸を出し
た。『著述選第五卷』（昭和十七年）では、薫習にかわって
串習（かんしゅう、げんしゅう）を使っている。『爾雅』に「串、
習なり」とあり、薫習も串習も「習わし」の意味。

二十五 南無阿弥陀仏 前出の松原恭讓『真宗の信念と妙
好人逸話』（昭和十二年）の「伊賀の三左衛門と大阪の山
川道生の事」に依拠している。

「精神文化」第十二卷第七冊（昭和十五年二月二十九日発行）
の「宗教叢談（七）」に加筆して掲載された。『著述選
第四卷』（昭和十六年）にも、この加筆した「南無阿弥陀
仏」が転載されている。

「富士川游先生稿 翻刻と補注」終